

最近では、「人工知能」という言葉を目にしない日はない。人工知能とは「学習・推論・判断といった人間の知能のもつ機能を備えたコンピュータ・システム」(『大辞林』)である。いまは第3次の人工知能ブームと言われているが、期待外れとされた以前のものとは違い、社会を根本的に変革する可能性を秘めたものと私は感じる。

「いま何時?」「現在地の気温は何度?」と、手元のスマホに声をかけて確か

## 人工知能と人間の労働

ってくる。便利な人工知能の機能だ。「超」整理法でも有名な経済学者野口悠紀雄氏は、思考の整理や執筆などの大部分を、スマホを利用した口述式に変更したとのことだ(『話すだけで書ける究極の文章法 人工知能が助けてくれる』)。

ディープラーニングという新しい手法(アルゴリズム)が最大の要因となって、人工知能の再評価が高まった。それが実用化されたのは、不特定多数の人間やモノ(スマホもそのひとつ)から途方もない量のデータ(ビッグデータ)が入手可能になったことが大きい。莫大なデータのパターンを学習することによって、人工知能はますます賢くな

る。人工知能およびそれに付随する自律型ロボットが普及する社会に對峙するためには、前向きにそれを使いこなす努力が必要だ。さらに、中高年の再教育と再就職の機会が重要になる。

# 人間の尊厳を

# 考える契機にも

めてほしい。クラウド(遠隔にあるコンピュータ群)に送られた音声が即座に認識されて、的確な答えが返



名古屋市立大学大学院  
経済学研究科教授

河合 勝彦

ていく。2030年には、人間の知性と同等以上の汎用的な人工知能が出現するという予測さえある。

また、オックスフォード大学の研究者と野村総合研究所の調査によると、人工知能の活用によりわが国で労働の自動化が進む可能性は極めて高く、10〜20年以内で現在の仕事の約49%が自動化可能だということだ。近い将来、人間の役割はどうなってしまうのか。一方、あたかも人間の存

在に責賤があるかのように、社会的弱者とされる人間を狙った痛ましい事件が起きている。この反社会的論理に従えば、人類よりも身体的かつ知性的にも上回った人工知能が出現したとき(これをシンギュラリティと呼ぶ)、人間は機械の完全な下僕となってしまうだろう。人工知能の社会への浸透は、人間の尊厳とは何か、そして人間らしく生きるとはどういうことかを改めて考える契機となる。

人工知能およびそれに付随する自律型ロボットが普及する社会に對峙するためには、前向きにそれを使いこなす努力が必要だ。さらに、中高年の再教育と再就職の機会が重要になる。

まず隗(かい)より始めよである。定年後の就農を目的として、私はクラウド連携の安価な気候観測装置を購入した。畑作可能な小さな裏庭に設置して、農業をどのように効率化しようかと考えている。幸いなことに、パワースーツと呼ばれる身体能力を増強する装置が次々と開発されている。肉体の衰えを感じる私のような中高年、さらには介護や農業に従事する女性にも朗報だ。また米国では、ハンドルのない自動運転車の公道テスト走行が近々始まる。郊外に住んでも、外出に不便はなくなるだろう。中高年の未来は、とてつもなく明るい。

かわい かつひこ 経営情報システム。テキサス大学オースティン校。Ph.D(Economics)。1964年生まれ。

